

雪女

(日本の昔話)

昔、ある村に、年老いたきこりと、みのきちという、わかいきこりがいました。冬のある日、二人は山の帰りに、ひどいふぶきにあい、川の近くの小屋にとまりました。夜中、みのきちが顔に冷たい雪を感じて目をさますと、白い着物の美しい女が、年老いたきこりに白い息をふきかけていました。きこりは、そのままこおりついて死んでしまいました。

女は、みのきちの顔をじつと見つめて言いました。「おまえは、わかいから助けてあげよう。でも、今夜のことを、だれかに話したら、おまえの命はないよ。」

次の年、みのきちは、お雪というやさしいむすめとけっこんし、子どもにもめぐまれました。

ある夜、みのきちは、ぬい物をするお雪の顔を見ながら、ついあの夜の話を話してしまいました。「おまえは、あのとき見た女に、よくにている。」

すると、お雪は立ち上がり、さけびました。「①それは、わたしです。話したら命はないと言ったのに。でも、子どもたちのことを思うと、あなたの命はとれません。」お雪は、白いきりになって、まどから消えていききました。

二人は、何にあつて小屋にとまりましたか。

ひどい

2 女が、話してはいけなかったことを、本文から五字で書きぬきましょう。

① 「それ」とは、何のことですか。

ア
みのきちが、あの夜に見た女

イ
お雪の子ども

ウ 年老いたきこり

4 お雪が、みのきちの命をとらなかったのは、どうしてですか